

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12710

研究課題名（和文）近代移行期、蝦夷地・北海道分領支配に関する歴史情報の復元的研究

研究課題名（英文）Restoration research of historical information about divided governance of HOKKAIDO in the transitional period between early modern and modern Japan.

研究代表者

三野 行徳（Mino, Yukinori）

昭和女子大学・人間文化学部・講師

研究者番号：30714224

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治維新前後の蝦夷地・北海道の分領支配との関わりのなかで分断状況にあるアーカイブズを、分領支配という歴史的経験によって結ばれた両地域の共有の歴史遺産として、整理・保存・研究・活用を目指すことを目的とする。具体的には、仙台藩巨理伊達家が移住した北海道伊達市と宮城県巨理町を中心に、仙台藩片倉家や一関藩、鶴岡藩など北海道に移住した経験を持つ武家を対象に、資料調査・整理・研究・活用を行った。なかでも伊達市では新たな資料の発見と資料整理・資源化を進め、目録を刊行した。また、伊達市では市民向けの概要書、巨理町では市民向けの漫画の慣習を行い、市民協働での活用を実践した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、武家の北海道移住に伴って分断状況にあるアーカイブズを復元することにある。北海道にある前近代の宮城県・巨理町のアーカイブズを調査し、整理・撮影し、目録を刊行することで、宮城県・巨理町でも利用できる環境を作り、ひいてはあらゆる人々の研究・活用が可能になる。本研究の過程で、複数の資料群についてこのような取り組みを行ったことが、移住とアーカイブズを巡る活動・研究モデルともなる。また、調査・研究過程を地域の人々と共同で行い、市民向けの書籍などで共有することで、研究経過を常に共有・公開し、さらには地域の人々を主体とした資料保全が可能になるよう、活動を行った。

研究成果の概要（英文）：This research aims to organize, preserve, research, and utilize archives divided due to the partitioned rule of Ezochi/Hokkaido before and after the Meiji Restoration, as shared historical heritage connected by the historical experience of partitioned rule. Specifically, we conducted surveys, organization, research, and utilization of materials on samurai families who had experience migrating to Hokkaido, centering on Date City, Hokkaido, where the Sendai Domain's Watarai Date family migrated, and Watari Town, Miyagi Prefecture. In particular, in Date City, we discovered new materials, organized and digitized them, and published a catalog. In addition, we published a general overview for citizens in Date City and a manga for citizens in Watari Town, and practiced utilization in collaboration with citizens.

研究分野：日本近世史・アーカイブズ学

キーワード：明治維新 北海道移住 アーカイブズ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、代表者のこれまでの科研課題(「明治維新と武家の北海道移住に関する研究」研究活動スタート支援、2013-14)(「明治初年武家の北海道移住に関するアーカイブズの復元的研究」日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C)、2016年4月-2019年3月)の成果を継承し、以下の課題を設定して開始した。

近代移行期の北海道(蝦夷地)は、東北地方の大名などによって分割支配される経験(分領支配)を二度有している。一度目は、安政6年(1859)に海岸防備の必要性から東北6藩が蝦夷地に領地を与えられ、開墾と警衛を担当した各藩分領期であり、二度目は明治維新後に北方警衛と開拓のために全国26の領主が北海道に領地を与えられ開拓移住と警衛に従事した、分領支配期である。本研究は、北海道の歴史的経験と深く関わるこの二度の分領支配と関わって、全国の大名のアーカイブズのなかに残された、近代移行期の北海道の歴史情報の収集・組織化を目指すものである。前近代の蝦夷地に関わる歴史情報としては、松浦武四郎等探検家の手になる紀行記録や、蝦夷地支配を担った幕府箱館奉行・松前藩の記録がおもに用いられてきた。しかし、東北諸藩を中心とする分領支配を担った領主のアーカイブズのなかには、開拓・移住・警衛といった課題のもとで、近代移行期の蝦夷地・北海道の実態を示すさまざまな記録が残されている。しかし、これらのアーカイブズは、残された場所(旧藩地)と内容(北海道)との乖離により、地域資料として十分に認知されているとは言えない。一方で、明治以降の移住者が北海道に持ち込んだアーカイブズは、旧藩地での前近代の活動を伝える歴史情報であるが、北海道に伝来してしまっただけで、旧藩地では存在すら認識されていないことが多い。このように、明治維新前後の蝦夷地・北海道の分領支配との関わりの中かで分断状況にあるアーカイブズを、分領支配という歴史的経験によって結ばれた両地域の共有の歴史遺産として、整理・保存・研究・活用の途を目指すことが、本研究の目的である。

本研究の前提として、現在北海道に暮らす人々にとって、武家の「苦難の開拓史」は、歴史のはじまりとして強い影響力を持ち、また公的な歴史において、「開拓史観」と呼ばれる武家の北海道移住に起原を置く歴史叙述が繰り返し替えされてきた問題がある。一方で、近代北海道において差別の対象となったアイヌの歴史からは、武家の開拓移住は「被侵略史」のはじまりでもあり、近代アイヌ史において、開拓使による差別的なさまざまな政策が遂行される起点として、武家の集団移住が位置づけられてきた。本研究は、北海道に残された(持ち込まれた)地域の歴史遺産から、この過程を再検証するものである。移住元と移住先とで分断状態にあるアーカイブズを復元し、公開する方法を検討することにより、北海道に暮らす誰もが、「苦難の開拓史」を相対化しあらたな歴史像を獲得する方法を模索するものである。そのためには、北海道に残された移住領主たちのアーカイブズの悉皆調査と、利活用のための環境整備が課題となる。

2. 研究の目的

明治初年の武家を中心とする北海道への集団移住は、「苦難の北海道開拓史」として、現在の北海道内諸地域の成り立ちを説明する確固たる歴史イメージを持って語られ、各自治体には地域博物館が「開拓記念」館として設立されている。これは、近代移行期の北海道に関わる歴史情報が十分に調査・研究されないまま、「苦難の開拓」の記憶のみが強調され定着してきたことによる。また、こうした歴史観は、開拓以前の歴史を、現在とはつながらない「別の記憶」化してしまい、特にアイヌと和人との歴史的関係を希薄化させる弊害を持っている。本研究は、明治維新後に北海道に領地を与えられた領主26家を中心に、幕末に蝦夷地を分領支配した東北6藩および、明治前期に北海道に集団移住した諸団体を対象に、近代移行期の蝦夷地・北海道に関する歴史情報の集約・資源化を行うと同時に、近代移行期のあらたな共同体の形成過程を検討し、「苦難の北海道開拓史」観を克服することを目的とする。

近代移行期の北海道に関するアーカイブズは、「伝来地と内容との乖離」という共通する特徴を持っている。幕末に蝦夷地を分領支配した東北6藩の資料のなかには、藩庁が作成した図面や記録、蝦夷地に赴いた藩士の記録など、膨大な量の幕末の蝦夷地に関わる資料が残されている。例えば、もりおか歴史文化館に伝来する旧南部藩庁資料には、南部藩が支配した幌別郡から箱館に至る噴火湾地域の膨大な図面や記録が残されている。これらの資料は、登別市・室蘭市・伊達市などの前近代の様子を伝える重要な資料だが、伝来地と内容との乖離から、北海道の現地では存在すらほとんど認識されていない。明治初年の分領支配に関しても、移住者が北海道に持ち込んだ資料のなかには、旧藩地の前近代の記録が多く含まれている。有珠郡(北海道伊達市)に移住した亘理伊達家の場合、旧支配地である亘理(宮城県亘理町)に関わる膨大な資料が北海道に持ち込まれている。代表者はこれまで、亘理伊達家と亘理町・伊達市を対象として、分断状況にあるアーカイブズを、発掘・整理・デジタル化によってヴァーチャルに復元するべく研究を進め、一定の成果を上げることができた。

アーカイブズの分断状況は、程度の差こそあれ、分領支配に関わった領主・地域に共通する特徴であり、旧藩地のアーカイブズが北海道に持ち込まれ、旧藩地において十分に活用できない状

況がある。さらに、分領期以降に北海道に移住した個人や集団においても、屯田兵として移住した元武士や豪農を中心とする集団移住団が、旧地の資料を北海道に持ち込んでいる事例が見られる。旧米沢藩士の本庄氏・柿崎氏は、明治23年(1890)に屯田兵として北海道厚岸に移住するが、そのさい、中世以来のアーカイブズを北海道に持ち込んでおり、中世の越後から近世の米沢に関わる歴史資料が北海道に所在している。本研究では、こうした分断状況にあるアーカイブズを、両地域を結ぶ文化遺産と位置づけ、研究者のみならず、両地域に関わるあらゆる人々がアクセスできる仕組みを模索すると同時に、収集したアーカイブズをもとに、近代移行期の北海道地域社会の変容を、「開拓移住が惹起する新たな関係史」として検討し、開拓史観の克服を目指すものである。

本研究は、「分断状況にあるアーカイブズの復元」によって、「移住を中心とする近代移行期の北海道地域社会の変容を「関係史」として把握する」という点において、従来の北海道地域史研究やアーカイブズ学研究には無い独自性を有している。移住を決意した領主や集団は、移住にさいし、何らかの選別をしたうえでアーカイブズを北海道へ持ち込んでおり、移住者に関するアーカイブズは、旧領地と北海道の移住先とに分断されて現存している。これらのアーカイブズは、中世末期から近世・近代の各家の記憶を伝える物である一方、移住にともなって移住先で惹起された新たな関係をも克明に記録している。また、このアーカイブズは、移住後、屯田兵や近代戦争、高度経済成長という過程を経て現在に至るまで、固有の役割を果たしていた。本研究は、特に現在に至る伝来過程に注目して、近代移行期の分領支配に関わった武家のアーカイブズを悉皆調査するが、これは、従来のアーカイブズ研究が、現在の伝来状況(伝来地・群)に規定され、それぞれの資料群に関する研究が精緻化する一方で、伝来の過程で分断された資料群の復元への意識が希薄だったことを克服する試みである。本研究が注目する「移住」は、当事者が空間を超えて移動し、移動の結果、過去の情報が別の地域に伝来するという事態を必然的に伴う。移住とアーカイブズとの関係の解明、および、アーカイブズの復元による時空間を超えた分断状況の克服は、近代以降の人や集団の移動とアーカイブズの伝来との関係を解明することにつながる。と考える。

近代移行期の北海道をめぐるのは、先述の通り、「苦難の開拓史」観が広く共有されており、歴史意識をめぐる開拓以前と以後とに分断が生じている。こうした状況は、とくに前近代アイヌの歴史について、(自分たちとは関係のない)別のもの、という歴史意識を醸成することが問題となっている。一方、近代以降の歴史については、あたかも北海道の歴史が武家の移住からはじまったかのような歴史観が官民ともに共有されているが、「苦難の開拓史」の歴史叙述のなかに、アイヌは基本的に登場しない。アイヌから見れば、武家を嚆矢とする北海道への和人の集団移住は「被侵略史」であり、明治10年代以降の政策を対象に、告発型の研究が進展している。本研究は、以上の研究のなかで捨象されてきた、幕末から明治初年の分領支配・移住を、地域社会を構成するプレイヤー(分領支配領主・家臣・場所請負商人・アイヌ)相互の関係とその変容(関係史)として検討するものであり、アーカイブズの復元は、こうした検討を実現するための方法でもある。

3. 研究の方法

本研究では、明治初年に北海道分領支配を許された26の領主について、北海道移住とその後の共同体形成過程の検討を、現在にまで残された記録(アーカイブズ)の復元的検討から行う。そのためには、現地での所在資料の調査・整理・研究が欠かせない。具体的な調査地域は北海道(伊達市・札幌市・登別市など)、宮城県(仙台市・白石市・亶理郡亶理町など)、東北地方(盛岡市・鶴岡市など)の資料保存機関および個人宅である。年2・3回程度、それぞれの地域において、資料整理・目録作成に取り組み、そのうえで、所蔵者・関係機関と連携をとりながら研究を進め、了解が得られた段階で、資料情報の公開、成果の発表を行う。資料調査にあたっては、これまでの蓄積のある亶理町-伊達市について、研究・成果の公開を深めてモデルを構築する一方で、26の領主それぞれについて資料調査を行い、武家の北海道移住に関する研究基盤の整備を行うことを目指した。

宮城県亶理町-北海道伊達市 亶理伊達家については、これまでの蓄積を踏まえて以下の3点を課題として設定する。

(1)家臣団所蔵資料の調査・整理・資源化 亶理伊達家に伝来する資料は既に整理・公開されているが、伊達市・亶理町に伝来する家臣団所蔵資料は未整理であり、研究もされていない。本研究では、伊達市在住の子孫家に伝来する亶理伊達家老田村家文書について、整理・保存措置・目録記述・撮影を行うことを主要な課題とした。また、亶理町に伝来する家老志賀家文書についても、研究を進める。また、その他の家臣団所蔵資料について、整理・保存・目録記述・撮影を進める。併せて、他の家臣の家に伝来した資料の調査もすすめ、可能な限り、保全・整理・デジタル化を進めた。

(2)亶理伊達家をモデルとした「関係史」の模索 亶理伊達家および家臣団の家、開拓使資料などの研究を進め、「開拓使」とも「被侵略史」とも異なる「武家の北海道移住が惹起するあらたな関係史」として、明治初年の武家の北海道移住を多角的な視点から研究した。

(3)資料・情報の共有・還元 (1)(2)の方法と関わり、本研究では、研究活動のプロセスを市民と共有することを目指す。具体的には、北海道伊達市および亶理町において、資料調査・整理などの活動を市民協働で行うとともに、研究成果を市民に還元する具体的な取り組みを行った。

その他の領主 明治初年に北海道に領地を与えられた領主は 26 家である。そのうち、巨理伊達家を除く 25 の家については、基礎的な資料情報を収集するとともに、可能な限り関連資料を悉皆調査を目指した。26 の領主についての基礎資料は、北海道立文書館所蔵開拓使公文書によって、移住前後の過程をおおよそ知ることができるため、まずは同館所蔵の資料をすべて把握した。併せて、地域に残る史料から関連資料を探索し、調査・研究を進める。具体的には、関連資料の所在が確認できている片倉家、庄内藩、一関藩、盛岡藩および、明治 10 年代に移住した徳島県平民鎌田家に伝来する資料である。

4. 研究成果

(1)宮城県巨理町-北海道伊達市 巨理伊達家についての成果は、以下の 3 点にまとめることができる。

巨理伊達家家老田村家資料の整理・目録刊行 伊達市において調査を重ね、巨理伊達家家老田村家に伝来する田村家資料について、整理(番号付与)・保存措置(中性紙封筒・保存箱)・目録作成・デジタル化を行い、目録を作成して刊行した。田村家資料は古文書を中心に写真・武器・武器・書画などからなり、2000 点を超える大部な資料群である。本研究では、全点の整理・保存措置・デジタル化を行うとともに、詳細な目録記述を行った。その成果は、巨理伊達家文書調査研究会編『田村家文書目録』にまとめ、印刷製本して関連機関等に配布した。今後、撮影した写真データと目録情報を統合し、デジタルアーカイブを構築する予定である。

資源化 巨理町には、家臣団に伝来した多くの資料群がある。このうち、林奉行などを勤めた二階堂家に伝来した二階堂家文書、家老志賀家に伝来した志賀家文書、巨理伊達家御用商人渡辺家文書について、巨理町と協力して整理・研究を進めた。具体的には、巨理町で編さん中の巨理町史資料編に協力し、二階堂家文書の目録および史料集の編集を行った。また、同資料編にて、志賀家文書の目録・資料編の準備も行った。その成果は、『二階堂家旧屋敷下張文書』(巨理町史資料編第 2 集)として 2020 年 3 月に刊行した。また、巨理町史編さんの一環で、巨理伊達家家臣団の詳細な家譜集である「巨理世臣家譜略記」および、巨理伊達家に残された家臣団名簿である分限帳の史料集刊行準備を進めている。これらはいずれも巨理伊達家中を理解する上での根本資料であり、巨理伊達家の研究はもとより、現在につながる移住者の先祖を知る手がかりとして、重要なアーカイブズである。志賀家文書は 2027 年度、渡辺家文書は 2030 年度に刊行される予定である。これらの一連の資料の翻刻は、伊達市在住の市民グループが担っており、巨理町・伊達市・市民グループ・科研チームとの協働体制を構築することができた。伊達市においては、伊達市大雄寺が所蔵する巨理伊達家中の新たな史料整理を市民グループと協働で実施した。

成果の還元 伊達市では市民協働の研究会や巡見を開催し、成果の還元・共有、資料整理の共同作業などを実施した。コロナ禍のなか、講演会や講座等は充分に行い得なかったが、今後、継続的に成果の還元を行いたい。また、伊達市-巨理町での取り組みを広く資料保存・継承の文脈へ位置づけるべく、積極的に研究発表を行った。併せて、伊達市で編さんされた市民向けの概説本『北の大地と生きる - 海を渡った巨理伊達家臣団 -』(2019 年 4 月)に企画段階から参画し、全面的に監修を行った。巨理町でも、町が主体となって刊行準備を進めたまんがふるさとの偉人『伊達邦成』(2024 年 3 月)において、内容がより研究成果を反映させたものとなるよう監修を勤めた。

(2)他の領主について 巨理伊達家以外の北海道に移住した領主については、北海道立文書館にてほぼすべての基礎資料の撮影を行い、概要をまとめることができた。併せて、地域に伝来した関連資料について、以下の成果を得ることができた。

庄内藩-虻田町 虻田郡に領地を与えられた庄内藩(大泉藩)について、鶴岡市郷土資料館にて調査を行い、多くの関連資料を確認することができた。同藩は幕末にも北海道に領地を与えられており、幕末の北海道支配関連資料、明治初年の虻田町支配関連資料を確認したうえで、後者について全点撮影を行い、分析を進め、科研内研究会において、研究報告を行った。

盛岡藩-有珠郡 幕末に有珠郡を管轄した盛岡藩について、研究協力者清水詩織が盛岡市に伝来する関連資料の調査・研究を行い、科研内研究会にて研究報告を行い、研究成果を「安政期における噴火湾の海防と盛岡藩の分領化」(清水詩織『近世後期の海防と社会変容』勉誠社)として発表した。

鎌田家-壮瞥町 明治 10 年代から 20 年代にかけて壮瞥町の開拓を行った、徳島出身の鎌田家に伝来した史料について、壮瞥町の協力を得て、整理・全点撮影を行った。

研究のまとめ 以上の活動・調査に加えて、本研究では、巨理伊達家の開拓移住について、幕末の有珠郡の支配から明治後期の移住までを含めて、分担者・協力者で分担して研究を進め、年に 1~2 度の科研内研究会にて報告を行った。具体的なテーマは以下の通りである。

幕末の有珠郡支配・海防 / 幕末~明治期の有珠郡の寺社 / 北海道分領支配の政治史的分析 / 分領支配の比較検討(虻田・室蘭・白老) / 明治初年有珠郡の教育 / 明治中後期の巨理伊達旧臣の北海道移住 / 研究成果の市民への還元

本研究では 26 の分領支配領主の調査を目指したが、北海道立文書館所蔵のものを除いては、以上が主な成果となる。コロナ禍の影響を受けて、現地調査が充分に実施できなかったため、他の領主の資料については今後の課題となる。

以上の研究成果は、論文集として 2025 年度に発表するべく、準備を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 三野行徳	4. 巻 754
2. 論文標題 維新时期、旗本家の構造－解体過程から考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史学研究月報	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三野行徳	4. 巻 89
2. 論文標題 趣旨説明（シンポジウム 旗本研究のこれまでとこれから 埼玉から旗本を考える ）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関東近世史研究	6. 最初と最後の頁 79-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三野行徳	4. 巻 83
2. 論文標題 地方文書のなかの旗本史料 旗本小堀家と金子家・巻島家	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 埼玉地方史	6. 最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三野行徳	4. 巻 847
2. 論文標題 紹介 岩橋清美・吉岡孝編著『幕末期の八王子千人同心と長州征討』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 107-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊達元成	4. 巻 54(8)
2. 論文標題 市民参加・市民参画のもとでの新たな博物館づくり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 博物館研究	6. 最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊達元成	4. 巻 69(6)
2. 論文標題 全国歴史民俗系博物館協議会 全国歴史民俗系博物館協議会北海道総会参加報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地方史研究	6. 最初と最後の頁 64-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三野行徳
2. 発表標題 旗本研究の現状と課題 - 共同研究・資源化の視点から -
3. 学会等名 横浜幕末維新史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤静香
2. 発表標題 明治期有珠郡におけるキリスト教の布教について
3. 学会等名 巨理伊達家文書調査研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三野行徳
2. 発表標題 17世紀武蔵野新田の開発と旗本抱屋敷
3. 学会等名 関東近世史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三野行徳
2. 発表標題 近世武家社会とキリシタン統制-臼杵藩家中の類族を考える-
3. 学会等名 マレガ・プロジェクト
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三野行徳
2. 発表標題 維新时期、旗本家の構造-解体過程から考える-
3. 学会等名 歴史学研究会近世史部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 工藤航平
2. 発表標題 コロナ以降のアーカイブズを考える - 東京都公文書館の取り組みから -
3. 学会等名 全国大学史資料協議会東日本部会第120回研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水詩織
2. 発表標題 もりおか歴史資料館所蔵蝦夷地警衛関係資料について
3. 学会等名 巨理伊達家文書調査研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 清水詩織・石田七奈子
2. 発表標題 田村家文書目録編成について
3. 学会等名 巨理伊達家文書調査研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 黒田格男
2. 発表標題 伊達藍の成立とその特異性について
3. 学会等名 巨理伊達家文書調査研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 工藤航平
2. 発表標題 海を渡った巨理伊達家中の文書 史料の所在が語る巨理伊達家の北海道移住
3. 学会等名 巨理町立郷土資料館 ものしり大学院（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 大宮耕一著、三野行徳・檜皮瑞樹・工藤航平・石田奈七子・久留島浩監修	4. 発行年 2019年
2. 出版社 伊達市教育委員会	5. 総ページ数 236
3. 書名 北の大地と生きる - 海を渡った巨理伊達家臣団 -	

1. 著者名 清水詩織	4. 発行年 2024年
2. 出版社 勉誠社	5. 総ページ数 392
3. 書名 近世後期の海防と社会変容	

1. 著者名 株式会社ユーメディア編、三野行徳・檜皮瑞樹・工藤航平監修	4. 発行年 2024年
2. 出版社 巨理町教育委員会	5. 総ページ数 102
3. 書名 マンガふるさとゆかりの偉人 北海道へ渡った巨理伊達家の殿様 伊達邦成	

1. 著者名 巨理伊達家文書調査研究会（久留島浩・三野行徳・工藤航平・檜皮瑞樹・清水詩織・伊達元成・黒田格男・伊藤静香・石田奈七子・菅原孝明・平塚理子）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 巨理伊達家文書調査研究会	5. 総ページ数 236
3. 書名 田村家文書目録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	黒田 格男 (kuroda norio) (60885432)	伊達市噴火湾文化研究所・その他部局等・学芸員 (80123)	
研究分担者	伊達 元成 (date motoshige) (70620897)	伊達市噴火湾文化研究所・その他部局等・学芸員 (80123)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	工藤 航平 (kudo kohei) (30599551)	国立歴史民俗博物館・研究部・准教授 (62501)	
研究協力者	清水 詩織 (shimizu shiori)	早稲田大学・非常勤講師	
研究協力者	伊藤 静香 (ito shizuka)	千葉大学・博士後期課程	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関